HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの貧困の経験［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	大澤, 真平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7161号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87125
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	OSAWA_Shinpei_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：大　澤　真　平

学位論文題名
子どもの貧困の経験

本研究の目的は、子どもの貧困の経験とその帰結を示すことにある。第一の課題は、子どもの視点からみた貧困の生活と認識を明らかにすることである。第二の課題は、子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンスの実現の実際を示すことである。貧困の中にある子どもの生活を検討することで、子どもにとっての貧困の経験を明らかにし、その子ども期の経験と若者期の経験の連続性を検討することで、子どもにとっての貧困の経験が貧困の世代的再生産につながることを示していく。

子どもの貧困に関する研究は、主に量的調査の分野で全体像の把握がなされてきた。その知見に基づいて、具体的な生活の様子、家族間の関係性や相互作用、あるいは社会的排除に置かれた状況、そして子どもの社会生活へのインパクトなど、当事者がそのことをどのように受け止めているかを明らかにするため、「子どもの声を聴く研究」がなされてきた。しかし、それらの研究では貧困の影響を「短期的な観点（子ども期それ自体）」と「長期的な観点（大人になってから結果）」の両方から理解する必要があると指摘しつつも、実際には子ども期あるいは子どもの「いま」への影響を明らかにするに留まっていた。そこで本研究では、貧困の中で子ども期を過ごした若者１２名を対象に、8 年間にわたる継続インタビュー調査を実施し、子ども期からの不利の継続と、貧困の世代的再生産を動態のなかで捉えることで、「子どもの貧困の経験」の意味を問い直し、貧困の世代的再生産の緩和・解消のための生活の保障とアプローチの方向性について検討を行った。

第１章では必要を充足する資源の欠如・不足や生活実践のための資源の調達と組み合わせといった「資源」の観点から、子どもの貧困の経験を明らかにするための概念の検討と整理を行った。そこでは、対処資源や社会関係的資源といった生活を組み立てるために用いる資源にも注目しつつ、物的・経済的資源や公共の社会的資源の欠如・不足と子どもの生活のあり方について考察する枠組みを示した。それは物的基盤に基づく子どもの生活、それに対する子どもの認識、その中での子どもの主体的な生活実践に与える影響を捉える視点となる。

第２章では、量的調査である北海道における子どもの生活実態調査のデータを用いて、子どもの生活と家族の持つ資源との関係について検討を行った。はく奪指標を用いた分析からは、経済、時間、社会関係、移動手段、情報といった資源および家族の状態と、子どもの生活水準との関連性が示された。貧困・低所得に置かれた世帯では所得の不足を他の資源で補うことで子どもの生活水準を維持する必要があるが、他の資源によって所得の不足を十分に補うことは難しく、他の資源ですら欠如している場合には、子どもの生活水準を維持することは相当困難になることが示された。

第３章では子どもがどのように自分の生活を形づくろうとしているかを示し、貧困の中にある生活の経験を当事者の視点から描き出すことを試みた。明らかになったことは、家族の状況が子どもの生活実現にダイレクトに影響を持つ様子であった。家族が疾病や失業、離婚

などで経済的に困窮するだけでなく、人手、時間、移動手段といった生活を構成するための資源を欠くことで、子どもの生活実現の可能性が狭められていた。また、子ども自身がアクセスできるサービス、物的資源、社会関係的資源も、子どもの生活実現を支えることは十分にできていなかった。子どもは資源の欠如・不足のなかで貧困のスティグマを感じており、加えて、生活実現の家族依存を当然視する規範意識のなかで、主体的に資源にアクセスして生活を組み立てていこうとするエージェンシーが押しとどめられていた。

4章では高卒前後から 20 代前半の子ども期と若者期の接点ともいえる時期の生活実現について検討した。明らかになったことは、子ども期から若者期までの、それぞれの「いま」の生活を実現していく資源の後押しの無さや資源の実用化の困難という状況、そのことにより生活を実現していく資源への評価や選択可能性に対する認識の幅が狭められてきたことであった。ライフチャンスは子ども期の経験や機会のあり方が子どもの将来展望の基礎になるとすれば、それは十分に保障されたものではなかった。

5章では8年間の継続調査をライフコースとジェンダーの観点から分析し、貧困の世代的再生産の実際を示した。子ども期からのライフコース全体を通じてみると、生活保護、児童扶養手当、各種支援事業、障害者年金、公営住宅など公共の社会的資源が生活の支えとなっていることが確認できる。しかし、公共の社会的資源は最低限度の、あるいはそれを下回る水準の生活しか支えられていなかった。また、子ども期の段階から、その親やきょうだいを含めた家族への社会的支援（ケアの社会化）が必要であること、そして、若者期に対する就労支援や自立支援のなかで若者たちが抱えるケアを必要とする人々に対する対応を含めていくことの必要性が示された。そのライフコース選択は子ども期から貧困の中にある家庭の生活の延長線上に描かれ、結果として多くの子どもたちに貧困から脱するライフチャンスは無かった。

本研究で明らかになったことは、貧困は子ども期を損なうものであり、将来的な機会だけではなく、適切な子ども期を得られなければ子ども自身のライフチャンスの実現にはつながらないということであった。そのためには必要をいかに充足するかという従来のアプローチではなく、実現したい生活の必要を満たす資源の充足をいかに図るかという対応が求められている。また、貧困がパワーレス・ボイスレスといった状態や、社会関係からの排除、他者の集合的なエージェンシーによる制約といった、生活実現の力を縮小させるような関係的/象徴的側面への影響をもたらし、当事者のエージェンシーを縮小させることも明らかになった。分配と承認は不可分であり、同じ社会構成員としての対等な存在の承認をどう実現していくか、資源の分配による参加の同等性の確保の重要性も示された。子どもや家族の生活実現への支援と政策は、これらのことを理解したうえで対応していくことが求められている。

以上のように、本研究は子どもの貧困の経験とその帰結を明らかにした。特に当事者の認識や主体性を、あくまで構造としての貧困のなかで捉えるために、「資源の欠如・不足としての貧困」という視点から「貧困の経験」を分析した点に独自性がある。また、従来の「子どもの声を聴く研究」は子ども期の影響しか実際には捉えられていなかったが、本研究は 8 年間に及ぶ縦断調査を実施し、動態の中で貧困の与える影響を明らかにしたことで、「子どもの声を聞く研究」の時間軸を拡張することに貢献した。そのことで世代間の不利と困難の移転という貧困の世代的再生産研究のこれまでの知見に、子どもの側から貧困の中に生活することの意味と影響を位置付けることができた。